

ルイジアナ州における墓上構造物と装飾品

著者	中川 正
雑誌名	筑波大学人文地理学研究
巻	14
ページ	145-168
発行年	1990-03-25
その他のタイトル	Grave Structures and Decorations of Louisiana Cemeteries
URL	http://hdl.handle.net/2241/00130037

ルイジアナ州における墓上構造物と装飾品

中 川 正

I はじめに	IV 墓上装飾品
II 研究方法	IV-1 貝
III 墓上構造物	IV-2 玩具
III-1 コーピング	IV-3 鉢植え
III-2 墓屋	IV-4 故人の写真
	V 結論

I は じ め に

北アメリカの墓地景観研究において、埋葬地の上に置かれた構造物や装飾品は、特に大きな関心を引いてきた¹⁾。埋葬された遺体、棺桶、副葬品等が、目につきにくいものであるのに対して、墓上の物体は容易に観察可能であり、広い地域にわたっての比較研究も行いやすいことが、その理由のひとつであろう。実際に遺体を収容する地上埋葬墓を除けば、これらの墓地景観要素は、埋葬機能に絶対不可欠という性格のものではなく、これが墓にふさわしいと感じる人々の価値観を、比較的直接的に反映する種類の景観要素である。その意味では、墓上構造物と装飾品の分布の分析は、人々の価値観の地域的パターンを発見する上で有効な手段になるであろう。

しかし、従来この墓地景観要素が、必ずしも効果的に記述されてきたとは言い難い。珍奇な個人的な要素をことさら大きくとりあげている短報は言うに及ばず、学問的に高度な業績をあげている文化地理学者の研究の中にも、景観の記述に関する一般性の判断が困難なものが多い。Jeane²⁾は、多様性に富む合衆国の墓地の中で、南部は比較的一様な墓地景観を示す地域であるとし、典型的な台地南部墓地タイプの特徴を、位置、規模、植生、装飾、墓地で行われる作業の側面から叙述している。その中で、墓地装飾の特徴としては、商業的墓石の欠如、自然石や木製の墓標、貝、水差し、ワインの瓶、プラスチックの瓶、皿、花瓶、玩具、人形などによる装飾、墓の上に建てる家屋型構造物等の事項が列挙されている。しかし、実際に南部の台地を訪れて、これらの特徴を有する墓地を発見することは容易ではない。現在の大多数の墓地は商業的墓石によって占められ、自然石や木製の墓標、その他列挙された装飾品は、ごく一部の農村の墓地にわずかにみられるにすぎない。いかなる時代のいかなる地域をとっても、これらの要素がそろっている墓地は少数であり、これらの要素をすべて知っている南部の住人も、ほとんどいないのが現状である。墓地景観の地理学的研究において第一人者として評価されているJeaneではあるが、彼の叙述は、学問的に正当化されうるものではないと考えられる。

Jeaneの研究を高度に発展させた研究は、北アメリカを代表する文化地理学者の一人である

Jordan³⁾によってなされている。Jordanは、テキサス州にある1,000以上の墓地における観察をもとに、アングロサクソン系、メキシコ系、ドイツ系の墓地の特徴を、位置、植生、墓上構造物、装飾、作業日、空間的配列、フェンス、門、墓標、墓誌等から叙述している。墓上構造物や装飾品としては、アングロサクソン系墓地における疑似地上埋葬墓、家型構造物、家族墓地を囲むコーピング（埋葬地上のコンクリートの枠）、貝やおもちゃによる装飾、メキシコ系墓地におけるマリヤ像やキリスト像、小祠等の存在、ドイツ系墓地における個々の埋葬地を示すコーピングや墓石に刻印される魔法のシンボル等の記述がされている。Jordanは、3つの民族タイプを対照させ、かつ、できる限り各要素の分布を示している点で、優れた業績を残した。しかし、彼の記述にどの程度の一般性があるかを判断することは依然として困難であり、その意味ではJeaneの研究の域を大きく出していないといえよう。

これらの墓地景観の叙述にみられる問題点は、文化地理学的景観研究に、ある程度共通してみられるように思われる。多くの文化地理学者は、彼自身の訓練された観察能力を通じて、ある地域集団とそれに対応する景観タイプを見だし、そして訓練された叙述能力を通して、家屋⁴⁾、納屋⁵⁾、集落パターン⁶⁾、道路網⁷⁾、フェンス⁸⁾等の景観要素を記述してきた。これらの成果は、たしかに文化地理学者ならではの重要な功績ではあるが、その現状の記載の一般性に関しては、その研究者の能力と良心を信じるか否かによって判断せざるを得ないものが多い。もちろん、客観性を持たせるために、かなりの努力が払われてきたことは否定できない。たとえば、家屋景観の研究を最初に本格的に手掛けたKniffen⁹⁾は、1930年代初期にルイジアナの主要道路をすべて巡回して、それぞれの家屋タイプの割合を等値線によって示した。しかし、それから半世紀以上を経た現在においても、景観要素の叙述法に関しては、ほとんど進歩をみていないのが現状ではなかろうか。

本稿は、以上のような問題点を踏まえて、合衆国ルイジアナ州における墓上構造物と装飾品の叙述を、体系的に、読者に一般性を判断させる方法で行うことを目的とする。まず、体系的なサンプリングによって調査墓地を選定し、そしてそれぞれの要素の分布を、地図上に示されたそれらの調査墓地に可視的に表現することによって、読者に判断の行いやすい叙述を試みる。そのことによって、従来の墓地景観タイプの記述のゆがみをも明かにし、今後の文化景観研究の反省点を提示したい。

本稿で対象とするルイジアナ州は、州の北部と南部による際だった民族構成の差異のゆえに、文化地理学研究の格好の対象となってきた。北ルイジアナに居住する大多数の民族集団は、「台地南部人」(Upland South)と呼ばれる、スコットランド系アイルランド人の血が色濃く混じったアングロサクソン系の民族である¹⁰⁾。現在の台地南部人の祖先は、1725年から1775年にかけて、現在のペンシルベニア州のランカスターからジョージア州のオーガスタにいたるアパラチアやピードモント地域において、独自の文化を形成した後、1775年から1825年にかけて、北ルイジアナを含む合衆国南部全域にわたって、移住を行ったとされている。南部の台地地域全域にわたって、彼らの属性や、彼らの形成する景観には、驚くべき類似点があることが指摘されている。台地南部人の多くは、バプテスト、メソジスト、長老派を中心とする、合衆国でも最も保守的なプロテスタントである。この南部の台地地域においては、散村的な集落形態が卓越する。

これに対して、南ルイジアナに住む人々の大多数は、フランス系である。彼らの祖先は、カナダのアカディア島（ノバスコシア）からイギリス政府によって追放され、1765年から1785年にかけて南ルイジアナに移住してきた小農民であった。彼らは「ケイジャン」（Cajun）と呼ばれ、現在でも50代以上の人々が、家庭内でフランス語を常用している。台地南部人とは対照的に、彼らの宗教は、ほとんど例外なくローマカトリックである。典型的な南ルイジアナでは、集落が河川の自然堤防上に集村的形態をとって分布し、郡の中心都市では、カトリック教会が中心にそびえている¹¹⁾。

さらに、ルイジアナの人口の30%を占める黒人は、主にミシシッピ川流域のプランテーション地域や、ニューオーリンズやバトンルージュ等の都市に居住しており、様々な少数民族もいくつかの文化島を形成している。このルイジアナは、人種、民族、地域、都市農村、宗教によって多様な墓地景観を示しており、これら様々な社会・文化的要素を考慮した叙述法が求められている。その点で、本稿の目的とする体系的な景観記述を試みるうえで、好都合な地域であるといえよう。

II 研究 方 法

ルイジアナ州において、墓地景観の記載を体系的に行うためには、明確な基準によって抽出されたルイジアナ州全域にわたる墓地の調査をもとに、地域、民族、人種、宗教等の差異が、読者に客観的に判断できるように、データの提示が行わなければならない。墓地はその境界が明確な1つのユニットとして扱うことが可能であり、また民族、人種、宗教集団ごとに墓地を形成している場合が多いために、比較的容易に集団と景観との対照を行うことができるであろう。

1985年時点において最新の、アメリカ国土地理院（United States Geological Survey）発行の大縮尺の地形図には、3,180の墓地がルイジアナ州内に記載されている。この全ての墓地を調査することは実質的に不可能であるので、体系的なサンプリングがまず必要とされる。

理想的なサンプリングは、次のような条件を満たすであろう。まず第1に、抽出すべき墓地は、ルイジアナ全域を覆うものでなければならない。第2に、サンプルはカトリックとプロテスタントの墓地、白人と黒人の墓地、都市と農村の墓地をすべて含み、それぞれのカテゴリー内に、統計的検定を可能にするサンプル数が存在しなければならない。第3に、サンプルは主観的な偏りを排除して決定されねばならない。

しかし、この理想的な抽出を行ううえで、いくつかの現実的制限が存在する。墓地に関する既存の統一的データは、アメリカ国土地理院発行の地形図のみである¹²⁾。地形図に記載されている情報は、墓地の位置と名前に限られ、その所有者の宗派や人種等に関する情報は、現地に行くことなしに入手することは不可能である。したがって、集団の属性を考慮にいれたサンプリングは困難である。しかし、宗派をまったく考慮にいれずに、サンプリングを行うと、抽出された墓地が地域の属性を代表させないものになることが予想される。たとえば、筆者が悉皆調査を行ったアセンション郡においては、85%の住民がカトリックであるにもかかわらず、プロテスタントの墓地数がカトリックの墓地数の5.6倍にもなっている¹³⁾。ランダムサンプリングをおこなうと、この郡の大多数の人の価値を代表させている大きなカトリック墓地を、サンプルに含めない可能性が高い。

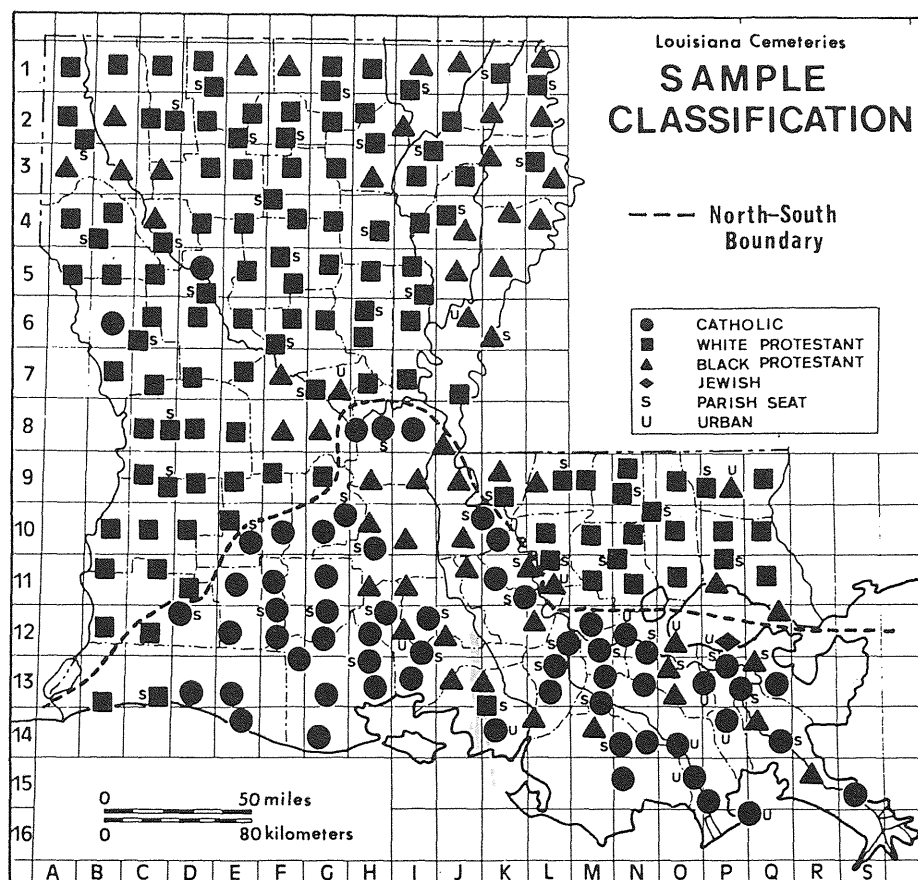
したがって、現実の制約を考慮にいれながら、できるだけ理想に近いサンプリングを行うために、本稿では2種類の層別抽出法を同時に用いた。まず、ルイジアナ州を覆う62,500分の1の各地形図から、その中心点に最も近い場所に存在する墓地が、それぞれ1つずつ抽出された。ルイジアナ州よりも他州にかかる面積の方が多い地形図は除外された。しかし、分析の対象になるためには、その墓地が1930年以前に設立され、かつ現在でも使用されているものでなければならないこととし、最も地図の中心点に近い墓地がこの2条件を満たさない場合は、次に中心点に近い墓地を抽出することとした。もちろん1930年よりも後に設立された数少ないメモリアルパーク等の墓地も重要な景観要素であるが、それらは地域的、宗教的特徴を欠くために、もしサンプルに含められた場合に、ほとんど例外的なパターンを示す。したがって、少ないサンプルで地域文化集団の特徴を最大限に分析するために、今回は1930年よりも後に設立された墓地を除外することにし、それらの分析は別稿の課題とした。この第1の抽出方法によって、178の墓地がまず選定された。

しかしこの方法では、サンプルに人口の多い都市の墓地や、地域に優勢な宗派の墓地が含まれていない場合が多い。この欠点を補うために、これらの抽出墓地に加えて、それぞれの郡庁所在地から1つずつの墓地が抽出された。もし1つ以上の墓地が郡庁所在地に存在する場合は、その都市の性格を代表させられる墓地を、その起源、規模、人種、宗派等の観点から判断して選択した。この方法による抽出は、幾分恣意的ではあるが、南部の郡庁所在地には、必ずといってよいほど、郡の中心的な墓地が設計され存在するために、ほとんど問題なく行われた。この第2のサンプリングによって、58の墓地が加えられ、計236のサンプル墓地が決定した。

データの収集は、各々の墓地の観察、測定、聞き取り、写真撮影等の野外調査によって行われ、墓地の所有者、人種、宗派等の社会文化属性に加えて、墓上構造物や装飾品をも含む景観要素が、調査表に記入された。野外調査は、1984年12月から1985年5月までに実施された。

これらの調査結果を地図化する上で、まず、いかなる集団の属性と墓地景観を対照させるかを、明確化しなければならない。本稿では、地域的、宗教的、人種的モザイクを有するルイジアナ州において、(1)北ルイジアナと南ルイジアナ、(2)宗教、(3)人種、(4)都市と農村という4指標に注目して、それをベースマップに表現することが、分布の解釈に役立つであろうと判断した。まず、北ルイジアナと南ルイジアナは、墓地の位置によって判断できるが、従来の研究¹⁴⁾に基づいて、便宜的な境界線をインデックスマップに設定した(第1図)。都市の墓地は、アルファベット記号によって示された。“S”は郡庁所在地に存在する墓地を示し、“U”はそれ以外の1,000人以上の人口を有する都市の墓地を示す。アルファベット記号を持たない墓地は、農村墓地と定義された。宗教と人種は、墓地に埋葬されている人々のマジョリティによって判断され、カトリック墓地は円形、白人プロテスタント墓地は正方形、黒人プロテスタント墓地は三角形、ユダヤ人墓地は菱形を用いて表現された。カトリック墓地はすべて白人が大多数を占めている。したがって、黒人が大多数を占める墓地は、黒人プロテスタント墓地のみである。

これらの属性を地図化した結果、これらのサンプル墓地の宗教的・民族的・人種的属性が、ルイジアナ州の実態を比較的忠実に代表させていることが明かになった。北ルイジアナには、プロテスタン



第1図 ルイジアナ州におけるサンプル墓地の分類

トのサンプル墓地が大多数であり、2つのみ存在するカトリック墓地は、かつてのスペイン人居留地に対応している。これに対して、南ルイジアナのサンプル墓地の67%はカトリックである。また南ルイジアナに存在する28のプロテスタント墓地のうち、24は黒人墓地であり、南ルイジアナにおける黒人の多くがプロテスタントであることを反映している。それ以外の4つのプロテスタント墓地は白人がマジョリティを占め、かつてアングロサクソン系の人々によって、入植が行われた地域に存在する。また、ニューオーリンズには、1つのユダヤ人墓地がサンプルとして存在する。黒人墓地は、南北ルイジアナ両地域に存在するが、黒人人口の集中している、プランテーション景観の卓越するミシシッピ川とその支流・分流の沖積地に多く分布している。したがって、このサンプリングによって抽出された墓地の分析によって、ルイジアナの墓地景観の全体像を、効果的に描き出すことが可能であろう。

以下の項では、これらの属性を持った墓地における、墓上構造物と装飾品のいくつかの要素の分布を読者に明らかになるように提示し、その客観的データをもとに、地域、宗教、人種、都市・農村的観点を中心に考察する。

Ⅲ 墓 上 構 造 物

墓上構造物は、広義に墓石、墓標、地上埋葬墓等、墓上の物体全てを含める場合もあるが、本稿では、直接埋葬機能にかかわらない、装飾的な色彩の強い物体を、人々の価値を比較的直接的に反映する墓上構造物として分析する。以下、コーピングと墓屋を墓上構造物の事例として、その分布を提示し考察する。

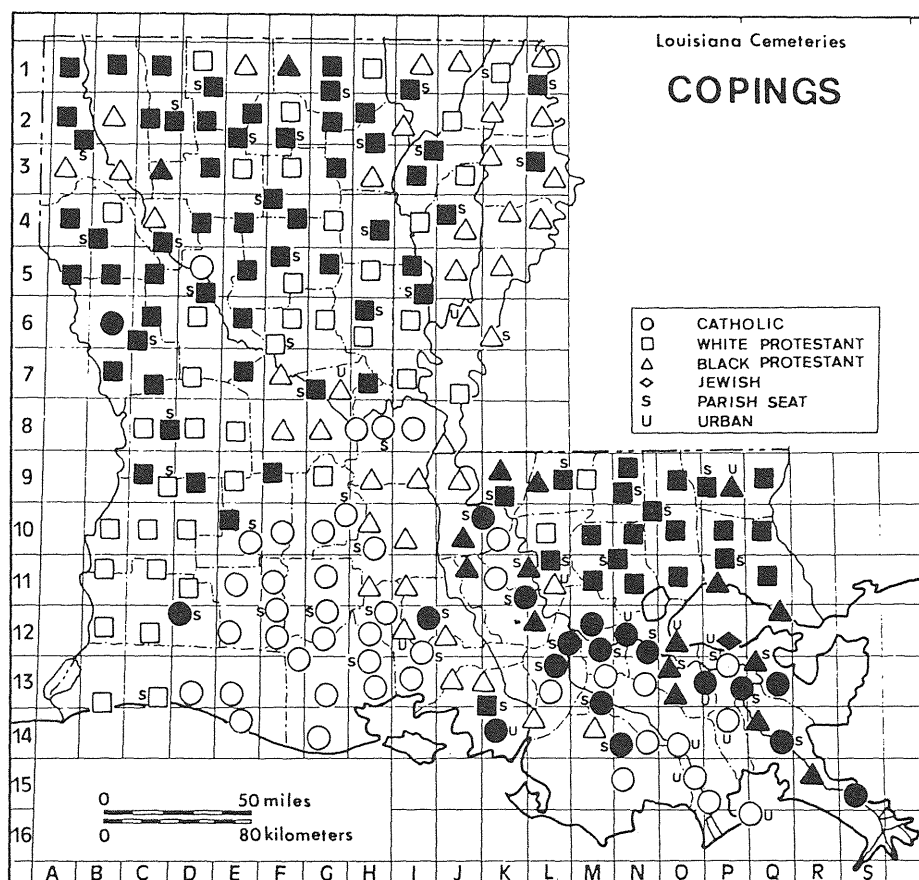
Ⅲ－１ コーピング

コーピングは、地下埋葬墓の上に、コンクリートや石によって埋葬地を示す縁石であり、個々の埋葬地ごとに縁どりを行うコーピングばかりではなく、家族の墓をまとめて縁どるコーピングもある(写真1, 2)。コーピングで縁どられた中は、土や芝生のままにする場合もあるが、砂、砂利、白い大理石の小片等を敷き詰める場合もある。

コーピングは、農村墓地によりも都市墓地に多く分布している(第2図)。コーピングは、都市墓地の69%に存在するのに対して、農村墓地の38%にしか存在しない($\chi^2=20.6$; $p<0.001$)。特に北ルイジアナの都市墓地において、墓地の敷地はコーピングによって家族ごとに区画されている場合が多い。この都市・農村の差異は、可視的な区画の必要性の差異が反映しているのかも知れない。農村では可視的な区画がなくても、人々が埋葬地の境界をよく知っているが、都市においては、コーピングのような可視的なシンボルによって、自分達の区画を表現する必要があったのかもしれない。また北ルイジアナの郡庁所在地の墓地には、市によって設立されたものも多く、そこでは墓地が設計された時に、すでに区画も考慮されていた場合もあると考えられる。

白人墓地と黒人墓地における、コーピングの頻度の差異も顕著である。コーピングは、白人墓地の54%に存在するのに対して、黒人墓地の29%にしか存在しない($\chi^2=11.1$; $p<0.001$)。このことには、黒人コミュニティの単位が小さく、区画を明確に行う必要性が小さかったことが反映していると考えられるが、黒人地区の景観によくみられるような、いわゆる整然とした秩序への関心の低さがある程度関連しているのかもしれない。また1980年のセンサスによると、1人あたりの1年間の収入は、白人が\$8,253であるのに対して、黒人が\$3,628と半分以下であることから、黒人の収入の低さが、コーピングを含む墓上構造物の頻度の低さに関連しているのかもしれない。

コーピングの地域的分布も、特異な形態を示している。コーピングは南ルイジアナよりも、北ルイジアナにより多く分布するが($\chi^2=11.3$; $p<0.001$)、それは、地上埋葬墓が卓越する南ルイジアナにおいて、埋葬地をコーピングによって刻印する必要性が低かったことに関連していると考えられる。しかし、南ルイジアナにおけるコーピング分布が、東部にあるミシシッピ川や、その分流であるバイユー・ラフシュ川の自然堤防に限られており、西部にはほとんどみられないことは、注目に値するであろう。この分布を一見すると、南ルイジアナ東部のコーピングは、北ルイジアナ東部からの伝播であることが予想されるが、コーピングの形態をより詳細に観察すると、この南ルイジアナにおけるコーピングは、ニューオーリンズからの伝播によるものと判断する方が、真実に近いのではない



第2図 コーピングの分布

黒く塗りつぶした記号は、コーピングが存在する墓地を示す。

かと考えられる。

ニューオーリンズに数多く分布するコーピングは、北ルイジアナのコーピングとは異なり、地上から30cmから1mの高さに築かれている（写真3）。この背の高いコーピングの起源に関しては、まだ明らかにされていないが、聞き取りや観察によって判断すると、ユダヤ人起源である可能性が高いと考えられる。ニューオーリンズは、元来排水不良の低湿な都市であり、墓地の多く分布する市の北部の大部分は海面下の標高であった。しかし、ユダヤ人達は、カトリック教徒が好んで用いた地上埋葬墓を異邦人の習慣として、現在にいたるまで受け入れることをしていない。1831年のニューオーリンズの市の条例¹⁵⁾には、いかなる地下埋葬も、4フィート以上掘って行わなければならないと定められているために、ユダヤ人達は地上埋葬墓を用いずに、かつ穴を深く掘らない方策を考える必要があったと考えられる。ユダヤ人達がコーピングを用いる習慣は、合衆国一般にみられるが、ニューオーリンズのユダヤ人達は、この習慣を排水不良の土地にうまく応用させた。彼らは条例による定めを解釈し直し、埋葬の深さをコーピングによって2フィート盛り上げた地表面から測定し、実際には2フィートしか掘らなかったといわれている。

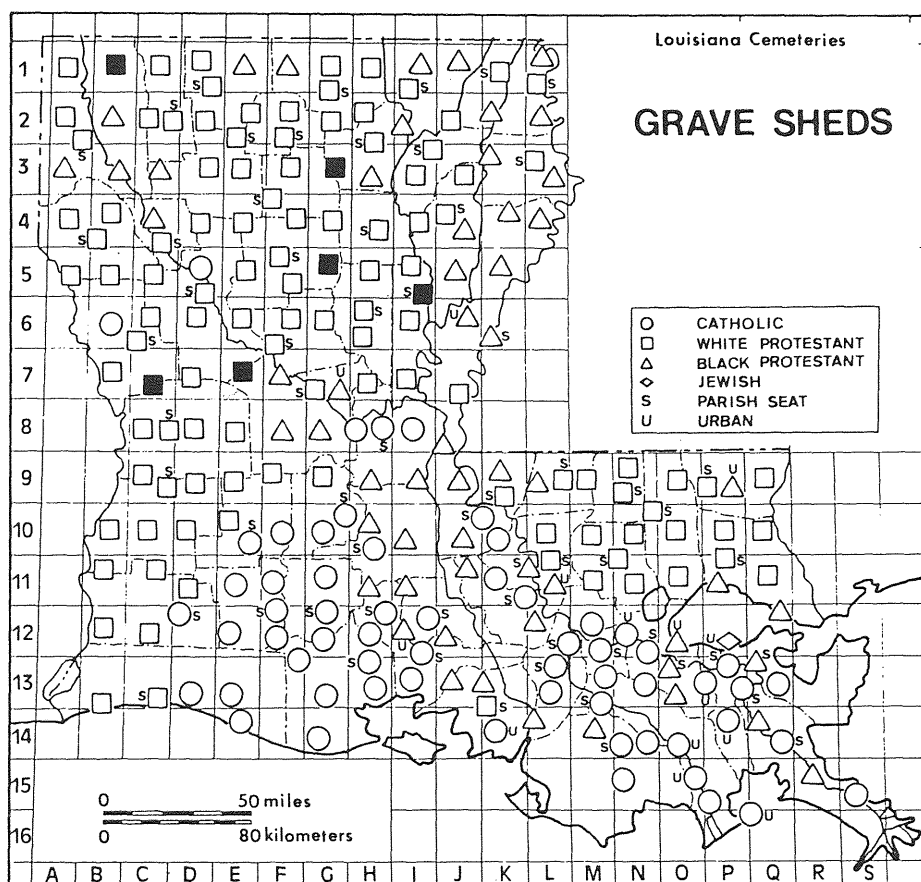
この盛り上げたコーピングは、ニューオーリンズのユダヤ人以外の人々にも受け入れられた。しかし、彼らはユダヤ人とは異なり、地上埋葬墓において行うように、1つの墓地を何度も再利用する。埋葬が行われて数年を経て、家族の1人が亡くなった場合に、彼らはコーピングを掘り返して、棺から遺骨等を取り出し、穴の底に落し、その上に新しい棺を埋める。したがって、ニューオーリンズの人々、特にカトリックの人々にとって、コーピングは家族墓としての意義を有する。カトリック教徒にとってコーピングが地上埋葬墓とよく似た意味を持つことは、彼らが、しばしばコーピングを、地上埋葬墓のように白く塗ることに現れている。しかし今世紀初頭には、ニューオーリンズの排水設備が整備されたために、大多数の地下の埋葬は、文字どおり4フィートの深さに行われるようになった。そのために、新しいコーピングは、以前ほど高く築かれてはいない。

南ルイジアナにみられるコーピングは、このニューオーリンズのコーピングと比較的類似している。それらの多くは、ニューオーリンズほどではないが、20cm程度の高さに築かれ、かつ白く塗られている（写真4）。おそらくこの形態は、南ルイジアナ東部のカトリック教徒達が、カトリックの卓越するニューオーリンズの習慣をまねたものであろう。しかし地上埋葬墓にみられる慣習と同様、ニューオーリンズ以外の地域では、コーピングを何度も繰り返して埋葬に用いることはしない。

Ⅲ-2 墓 屋

墓屋（grave shed）は、地下埋葬が行われている地点の上に建てられた家形の建築物である（写真5）。墓屋は、合衆国では希な墓上構造物であるが、その形態が特異で人目を引くものであるために、しばしば学者の関心を引いてきた。伝統的な墓屋は、木造であり、屋根はこけら板かトタン製である。墓屋の四方は、柱のみの場合もあれば、羽目板によって囲まれている場合もある。しかし、墓屋の中には、建築当時の流行をよく反映しているものもある。たとえば州北西部のベルノン郡のパイングローブ墓地にある1894年建築の墓屋は、当時流行の後期ビクトリアスタイルを反映した形態を示しており、縦に並べられた板の先端が、装飾的なカットワークになっている（写真6）。やはり州北東部の、地図上の位置7Cに存在するプレウィッツ・チャペル墓地において1932年に建築された墓屋では、当時流行したバンガロースタイルの軒先の形態（梁の先端が軒先に延びている形態）を有している（写真7）。プレゼント・ヒル墓地（地図上位置1B）にある1954年建築の墓屋は、アルミニウムの屋根と花崗岩の柱を持っている（写真8）。

墓屋の分布は、ルイジアナにおいても非常に希であり、サンプルの中で、6墓地のみに墓屋が存在する（第3図）。この6墓地すべてが、北ルイジアナの白人プロテスタント墓地である。そして6墓地中5つが農村墓地であり、主要道路から外れた場所に存在する。墓屋は元来少数であり、墓屋を有する墓地の近隣に居住する人々の中にも、その存在を知らない人が多い。Jeane¹⁶⁾は、ほとんどの台地南部墓地に墓屋が1つずつの割合で存在すると報告しているが、少なくともルイジアナにおいては彼の記述は誤りであり、筆者の観察によれば、ルイジアナ以外の南部においても誤りであろう。そして、この少数の墓屋は、ますます消えつつある。ルイジアナ北東部の古老によると、墓屋は旅人の嘲笑的になることがあり、それを恥じる人々が、その習慣を放棄していったという。したがって、

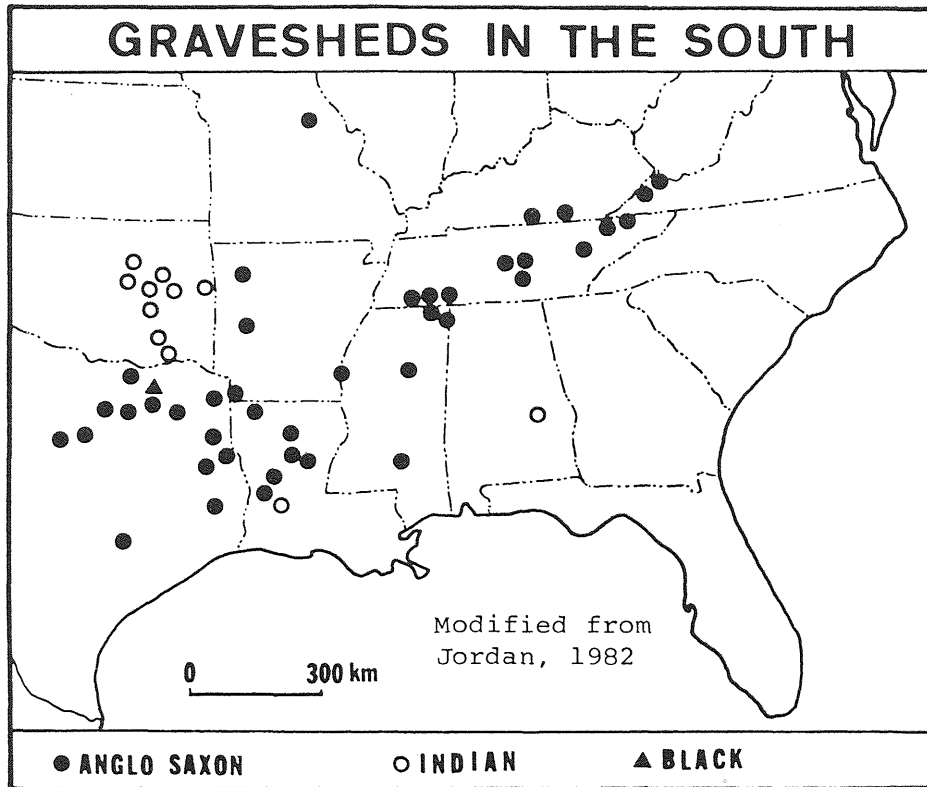


第3図 墓屋の分布

黒く塗りつぶした記号は、墓屋が存在する墓地を示す。

主要道路の近くから墓屋が消えていったといわれる。

この墓屋の起源に関しては、いまだに明かではない。Jordan¹⁷⁾が作成した合衆国南部における墓屋の分布と今回の研究成果を併せて地図化すると、墓屋の分布の報告がほとんど台地南部に限って行われていることが明かである(第4図)。この分布図によると、墓屋はバージニア、ケンタッキー、テネシーのアパラチア山脈部分と、ミシシッピ、アーカンソー、ルイジアナ、オクラホマ、テキサスの台地部分に存在する。墓屋が存在する黒人墓地の事例がテキサスに1つ報告されてはいるが、ほとんどすべての墓屋は、アングロサクソンまたはインディアン墓地に限って存在する。Jordanは、インディアン墓地における墓屋の分布に特に注目し、墓屋の起源はインディアンであろうと推測した¹⁸⁾が、この台地南部全域にわたる分布から判断すると、台地南部人の祖先が導入した物質文化であると考えの方が適当ではないかと考えられる。おそらく、18世紀に台地南部人の祖であるアングロサクソン人、スコットランド系アイルランド人、ドイツ人が、ペンシルベニアからジョージアにかけてのアパラチアやピードモント地域で独自の台地南部文化を形成していた時に、墓屋も物質文化の1要素として少数の人々に受け入れられたと推測される。したがって、彼らが18世紀末から19世紀初頭



第4図 南部における墓屋の分布

Jordan (1982), および筆者の調査により作成

にかけて南部の台地地域に移住をした時に、何人かがこの物質文化要素を携えていったものであろう。しかし、この墓屋の起源に関しては、今後の研究の課題となろう。

IV 墓上装飾品

Jeane¹⁹⁾は、台地南部の典型的な墓には、貝、水差し、ワインの瓶、プラスチックの瓶、皿、花瓶、玩具、人形などの装飾品が雑然と置かれていると記述したが、このような装飾の多くを同時に有する墓は希であり、彼の報告は誤りであるように思われる。ここでは、そのうち貝、人形を含む玩具、鉢植えの分布をとりあげて、その分布の一般性を検証する。また、最近墓石に飾られるようになった故人の写真を、新しい墓上装飾品としてとりあげ、その分布をも考察する。

IV-1 貝

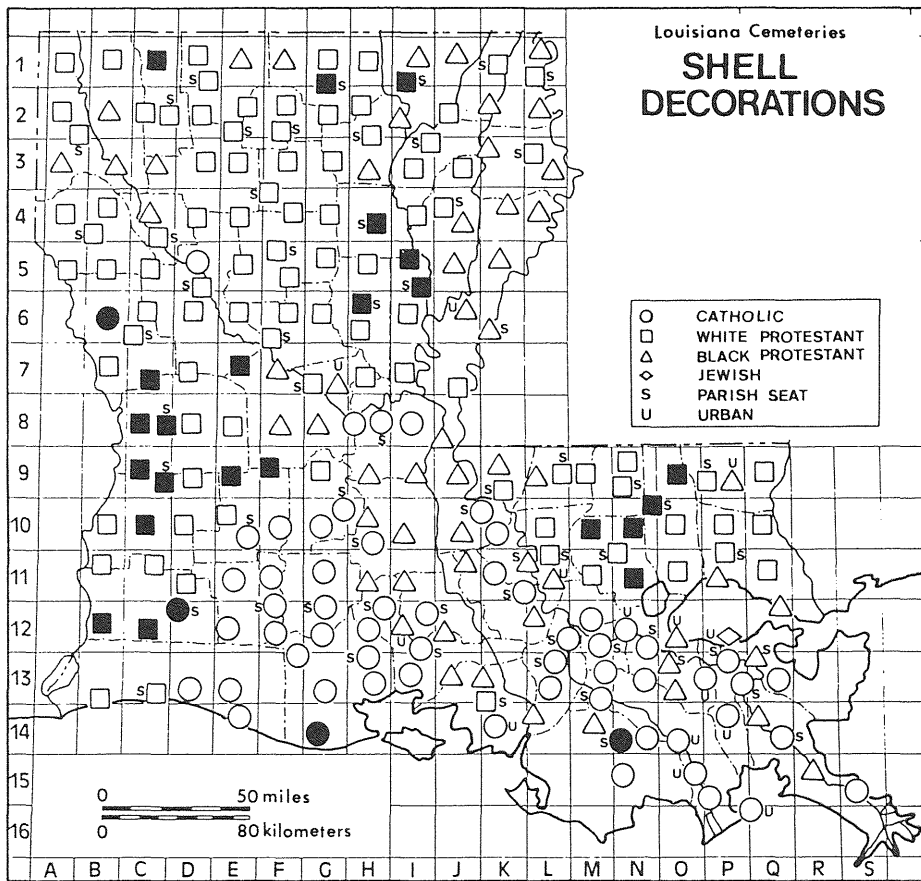
墓を貝によって装飾する習慣は、北ルイジアナのサンプル墓地を中心にいくつかみられる。装飾に用いられる貝には、二枚貝、たから貝、とり貝、ほら貝、牡蠣など、様々な種類がある。最も頻繁な貝装飾形態は、土で盛り上げた埋葬塚の上を、二枚貝が覆う形態であり（写真9）、時としてその塚が、貝とともにコンクリートで固められる場合もある（写真10）。また、ほら貝が墓石の上に据えられる装飾形態もみられる（写真11）。

この貝を用いた墓装飾は、ノースカロライナの海岸部からテキサス中央部にまで分布するという報告がなされている²⁰⁾が、ルイジアナにおいては、西部と東部の台地部を中心に少数の貝装飾の分布がみられるのみである(第5図)。文化地域で対応させてみると、貝を用いた装飾がみられる墓地は、北ルイジアナのサンプル墓地の16%であるのに対して、南ルイジアナでは4%にすぎない($\chi^2=7.1$)。貝装飾をおこなう墓地数が少ないために、統計的には0.001の有意水準で有意な差異が確認できないが、貝装飾は北ルイジアナに比較的多くみられることは言えるであろう。またサンプル墓地には、黒人が貝による装飾を行った事例は発見できず、白人墓地とは有意な差異を示す($\chi^2=10.3$; $p < 0.001$)。このことは、ルイジアナにおいては、貝による装飾は、ほとんど白人によって行われていることを示している。なお、貝装飾の分布と海との距離には直接関係があるようには思われない。

Jordan²¹⁾は、テキサスにおける貝装飾の分布がアングロサクソン系、ドイツ系、メキシコ系、黒人系、インディアン系墓地すべてにおよんでいることに着目し、貝を用いる習慣は、旧大陸の古代に遡るものであることを示唆している。彼はVlach²²⁾による貝装飾アフリカ起源説を引用し、ナイジェリアのヨルバ族の葬式において、たから貝が人々にほうり投げられる習慣があること、彼らがしばしば貝を墓の装飾に用いること、ガーナ人達が死者に貝を捧げたり、葬式において貝の贈与をしあう習慣があることなどが、現在の合衆国の貝装飾の起源に関連することを示唆している。さらに黒人奴隷の入港地であったサウスカロライナのチャールストン付近の黒人墓地で貝装飾がみられることや、黒人住民が大多数であるバージンアイランドに、貝におおわれた塚が存在することによって、貝装飾のアフリカ起源説が支持されるとしている。しかしJordan自身が作成したテキサスにおける82の貝装飾を含む墓地の分布図をみても、黒人墓地は1事例のみであり、南部の黒人墓地において、貝装飾がごく例外的にみられる景観要素であることは確かである。Jordanは、またインディアン起源の可能性も示唆しており、その根拠として、合衆国南東部の諸部族が、葬式の時に貝を手を持つ習慣があることを示しているが、貝装飾がインディアン墓地においても例外的であることは疑い得ない。

本研究とJordanの作成したテキサスにおける貝装飾の分布図から判断すると、貝装飾は南部台地のアングロサクソン系住民やドイツ系住民に最も頻繁に現れている。たとえばJordan自身の報告²³⁾によると、アングロサクソン系の卓越するテキサス南東部のビッグシケットでは、44%の墓地で貝装飾があり、テキサス北部のクロスチンバーでは44%の墓地に貝装飾がみられる。また、民俗学者であるClark²⁴⁾は、ドイツ系の卓越するテキサス中央部における墓地の大きな特色の1つが、貝装飾であると述べている。台地南部におけるアングロサクソン系やドイツ系住民の持つ貝装飾の頻度は、他民族のものと比較するとかなり多いと言えよう。

Jordan²⁵⁾は、貝装飾の起源の3番目の可能性として、Clarkの提唱したヨーロッパをあげ、この習慣が古代のキリスト教受容以前の女神信仰に遡る可能性を指摘しているが、そこまで遡らなくても合衆国においては、18世紀に南部台地文化がアパラチアからピードモントにかけての地域において形成されたときに、アングロサクソン人、スコットランド系アイルランド人、ドイツ人のいずれかが、母国から移植したものであろうことは、十分に予想される。この貝装飾の起源に関しては、今後より詳細な検討がなさねばならない。



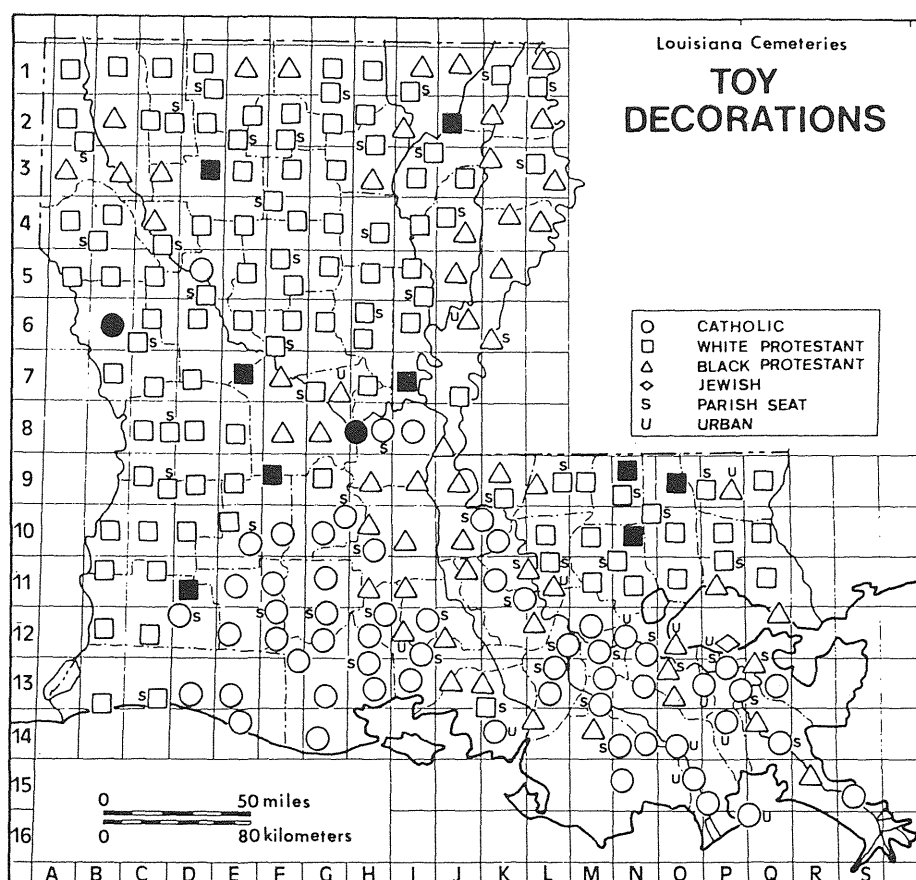
第5図 貝装飾の分布

黒く塗りつぶした記号は、貝装飾が存在する墓地を示す。

IV-2 玩具 貝

子供の埋葬地に玩具を置く習慣は、南部台地の典型的な墓地によくみられると報告されている。調査を行った墓地の中にも、子犬、鹿、蛙等の様々な玩具や人形がみられた（写真12, 13）。これらの子どもの埋葬地には、比較的新しいものが多く、まだ死んだ子どもの記憶が新しい親が、亡き子どもを偲んで玩具を置いたことがうかがえる。

しかし、調査を行った236墓地のうち、玩具を置いた墓地は11のみであり、この習慣があまり頻繁なものではないことがうかがえる（第6図）。この11墓地のうち、10墓地が北ルイジアナにあり、本研究の定義では南ルイジアナに属する1墓地も、北ルイジアナとの境界に存在する。そして、この11墓地すべてが、白人がマジョリティを占める墓地であり、かつ農村に位置する。すなわち玩具は、ほとんど北ルイジアナ農村の白人墓地に限定して存在するということがいえよう。南ルイジアナで大多数を占めるカトリックは、子供墓にクロスを墓標として置く形態を好むために、ほとんど玩具を置くことをしない。また、北ルイジアナの都市墓地において、玩具が装飾品として置かれない理由は、都市部において玩具が、整然とした区画にあわない雑然とした装飾品に思われているためかもしれない。



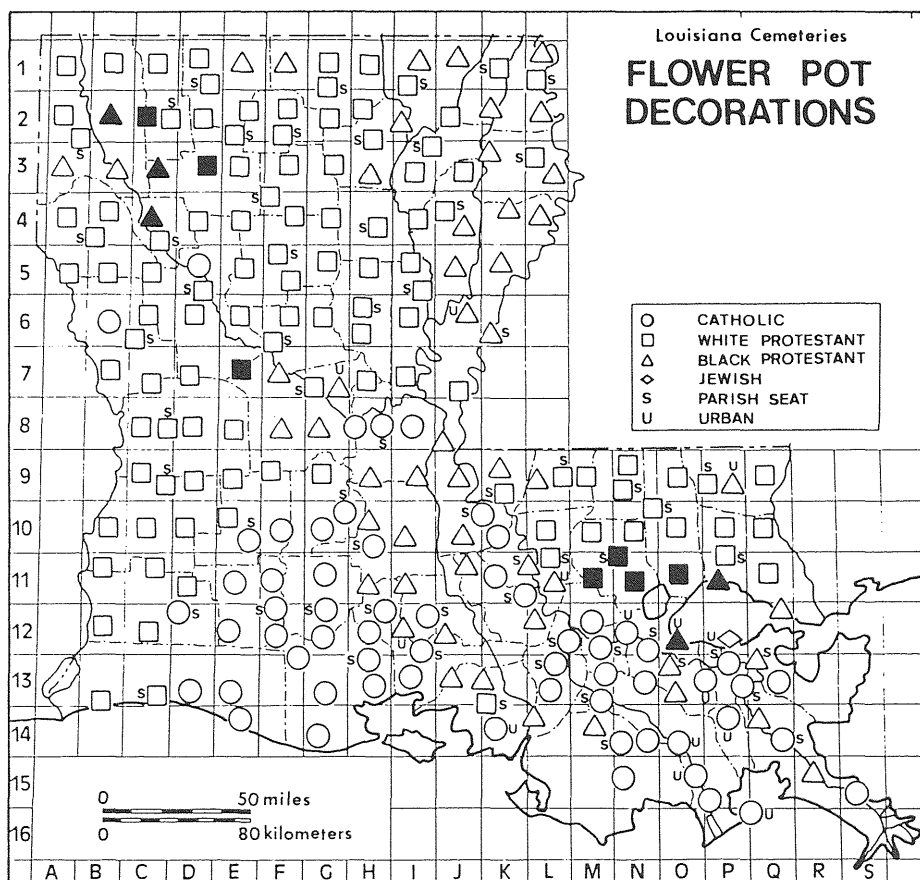
第6図 玩具装飾の分布

黒く塗りつぶした記号は、玩具を装飾品として墓に置いている墓地を示す。

そのように考えると、玩具は農村的な台地南部人が、適当であるとみなす景観要素と考えることが可能であるかもしれない。Jeane²⁶⁾が玩具を台地南部に典型的な景観要素であるとした記述は、その絶対的頻度の低さによって棄却されはするが、この景観要素がフランス系ルイジアナ等の文化地域に比較して、台地南部に特徴的な墓地景観要素であると言い替えれば適当であろう。

IV-3 鉢植え

Jeane²⁷⁾やJordan²⁸⁾は、台地南部の墓地の特徴として、塚となって盛り上げられた埋葬地の上に、様々な雑然とした物を装飾品として置くことをあげている。調査を行った墓地には、そのような記述を文字どおりに裏付けるような事例はなかった。しかし、塚の上に2つから8つの鉢植えを並べている事例はあり、それが彼らの言う伝統的な墓地景観の名残であることは予想される。最も典型的な鉢植え装飾景観は、土で盛り上げた埋葬地の、盛り上がりの部分に一行に、アルミニウムホイルで覆われた鉢植えや、プラスチック製の鉢植えを並べる形態である(写真14)。その中には花を植えた鉢植えばかりではなく、造花も存在する。また、コンクリート棺埋葬の卓越する南ルイジアナのミシ



第7図 鉢植え装飾の分布

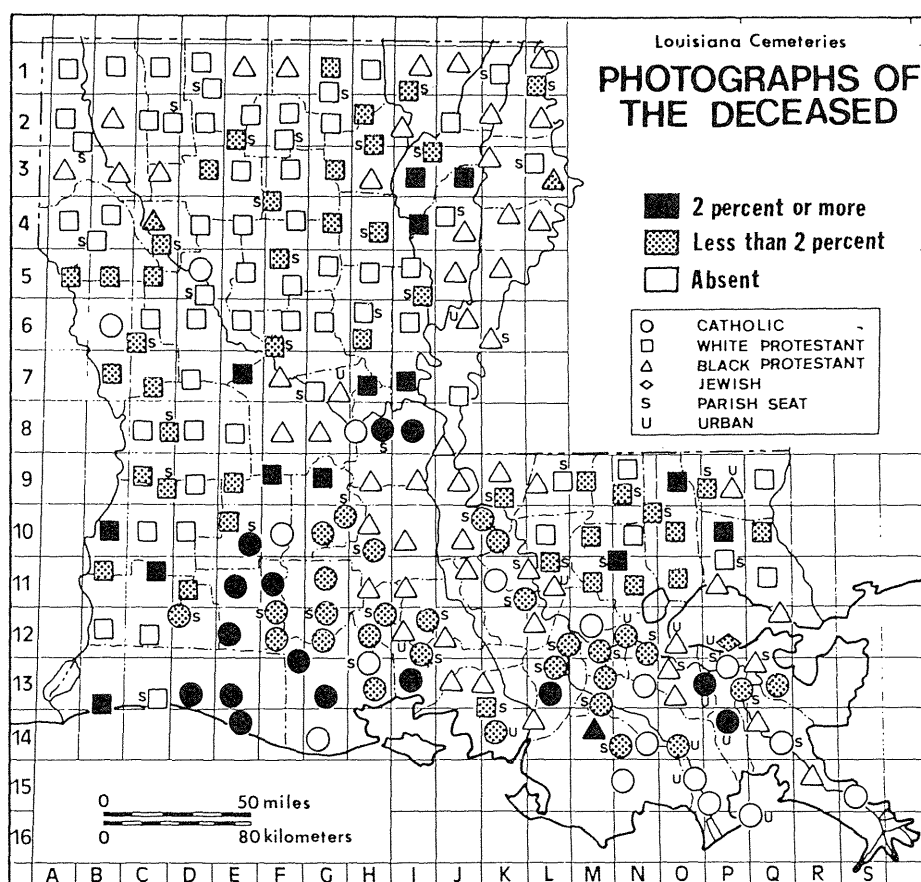
黒く塗りつぶした記号は、鉢植を埋葬塚の上に並べている墓地を示す。

シッピー川自然堤防上の黒人墓地（地図上の位置12O）では、塚の上ではなく、コンクリート棺の背に鉢植えを並べている（写真15）。

このいわゆる鉢植え装飾を行っている墓地は、サンプルの中に12しか存在しないが、その分布は、州の北西部のレッドリバー川に比較的近い地域と、南東部のモーレパ湖とポンチャートレン湖に近い地域に集中する特異な形態を示している（第7図）。それらはすべてプロテスタント墓地であり、1墓地（12O）を除けば、すべて北ルイジアナに存在する。また都市墓地は1事例のみである。この分布から判断すると、最初に予想したように、この習慣は台地南部においてかつてよくみられたといわれる、雑然とした装飾物を塚に並べる慣行の変化した形態であると判断することは、十分に妥当性を有すると思われる。しかし、なぜ2地域のみがこの分布がみられるかに関しては、今後の検討の課題になろう。

IV-4 故人の写真

墓上に現れた景観は、従来研究が盛んに行われてきた伝統的なものに限られない。最近行われるよ



第8図 故人の写真を墓石につけている墓地の分布

うになった装飾形態も、地域的、民族的、人種的、都市・農村的な差異を示し、それは伝統的な景観に劣らず、研究の対象にされうるものである。ここでは、比較的最近出現した、故人の写真を墓標につける習慣をその事例として取り上げ、その分布を考察する。

1人で、または夫婦で撮影した手の平の大きさの写真は、特別なアルミニウム製の楕円形マウントに取り付けられ、当人の墓石に取り付けられることがある（写真16）。高価なものには、アルミニウム製の蓋が取り付けられ、遺族が写真を見るときには、蓋を横にずらすようにするものもある。故人の写真を取り付ける事の起源は確かではないが、サンプル墓地の中では、1960年代初期のものが最も古いものであった。そして、故人の写真が急激に増加してきたのは、1980年代になってからのことである。この最近の増加には、セールスマンの努力もあろうが、自己を独自の写真によって表現したいという、現代人の実存主義的人間観がある程度反映しているものと考えられる。

故人の写真の分布には、人種間の差異が最も強く反映している（第8図）。故人の写真は、57%の白人墓地に存在するのに対して、6%の黒人墓地にしか存在しない（ $\chi^2=44.9$ ； $p<0.001$ ）。この差異は、人種間における価値観の差異より、経済的な差異をより強く反映しているものと考えられる。

実際、58%のサンプル黒人墓地において、墓標を持たない墓が卓越しているのが現状であり、その墓石を写真によって装飾するという発想は、まだあまり顕著に出てきてはいえない。

宗派による写真の分布の差異も顕著である。故人の写真を飾る墓石を有する墓地の割合は、カトリックでは73%であるのに対して、プロテスタントでは34%にすぎない ($\chi^2=27.6$; $p<0.001$)。このことは、カトリックが伝統的に、マリヤ、天使、イエス、聖人達の像を重んじ、墓標として据える習慣を有するために、自分達の写真を墓標に取り付けることに抵抗が少なかったためではないかと推測される。

地域的には、故人の写真を飾る墓地は、北ルイジアナよりも南ルイジアナに多く分布するが、これは南ルイジアナにカトリックが多いことに関連している。そして、2%以上の墓が故人の写真を飾っている墓地の分布の塊は、州の南西部や、南北ルイジアナの西部の境界部等にみられる。この分布には、この地域に販売が比較的積極的に行われていることや、独自の地域的アイデンティティがみられることなどが関連していると想像されるが、それ以上に、ある人がその墓地に故人の写真を飾る習慣を導入した時に、同じコミュニティの人々がそれを間似る傾向があることがより強く反映していると考えられる。都市と農村の差異は、それほど顕著にはみられない。

V 結 論

本稿は、従来の文化景観研究が研究者の定性的観察・記述能力の熟練性に頼りすぎ、客観的かつ体系的な記述を行う努力を怠ってきたとの反省から、ルイジアナにおける墓上の構造物と装飾品のいくつかの要素を事例として用いて、読者に一般性を判断できる形での体系的な景観分析を試みた。そのために、まずルイジアナの地域文化特性を代表させる墓地を抽出するための、できるだけ客観的なサンプリング法が考案された。その結果抽出された236のサンプル墓地は、地図上に示され、地理的な位置ばかりではなく、宗教、人種、都市・農村別等の属性をも、読者に明らかになるように記号で表現された。そして、いくつかの墓地景観要素の分布を地図上に示し、その分布と文化地域、宗教、人種、都市・農村的観点を対照させて分析し、従来の研究結果と比較考察した。

その結果、従来の研究の景観記載に、かなり不適切な判断が含まれていることが客観的に確認された。JeaneやJordanによって典型的な台地南部墓地の特性として叙述されてきた墓屋や、埋葬塚に貝や玩具等の他雑多な物を置く習慣が、実際にはごく僅かにしか分布しておらず、それが誇張され過ぎていたことが明らかになった。しかし従来の研究が、それらの墓地景観特性を台地南部墓地タイプの要素であると判断したことに、まったく正当な根拠がなかったわけではない。たしかにそれらの景観要素は希ではあるが、北ルイジアナにおけるその頻度を南ルイジアナにおける頻度と比較すると、それらは明らかに北ルイジアナ的、すなわち台地南部的要素として特徴づけられる。しかし従来の研究は、他の地域との比較によってのみ明らかになるはずの景観の地域的特徴を強調しようとするあまりに、それらを「典型的な」景観要素として、誇張して叙述してきたということは否定できない。そして読者には、それが実際どの程度典型的であるかという判断の根拠は与えられてこなかった。本稿で用いた方法は、墓屋、埋葬塚、貝装飾、鉢植え装飾等の要素が、北ルイジアナに典型的にみられる

要素でないにしても、北ルイジアナに特徴的な景観要素であることを、客観的に読者に理解できる形で提示できたと思われる。

また本稿は、南北ルイジアナという、いわゆる文化地域的観点からの考察ばかりではなく、宗教的、人種的、都市・農村の観点をも併せて、体系的に分析を行った結果、一つの景観要素に様々な集団属性が同時に対応していることが明らかになった。たとえば、コーピングの分布には、都市・農村差や人種差が、故人の写真には人種や宗教へのアイデンティティが、文化地域への帰属意識以上に強く反映している。この多次元の集団属性を同時に検討する視点は、文化地域を等質な地域と前提した従来の研究とは異なり、個人個人が様々な集団に同時に所属し、様々なアイデンティティを表現している現実を、より柔軟に表現することに成功していると考えられる²⁹⁾。

注 ・ 参 考 文 献

- 1) 墓上の構造物や装飾品への関心の高まりは、1976年にThe Association for Gravestone Studiesが設立され、*Newsletter*や機関誌*Markers*等の発行を行っていることに現れている。また1989年には、地理学者、人類学者、考古学者、歴史学者などの研究を編集したリーディング*Cemeteries and Gravemarkers*が発刊された。Meyer, Richard E. ed. (1989) : *Cemeteries and Gravemarkers: Voices of American Culture*. UMI Research Press, Ann Arbor.
- 2) Jeane, D. Gregory (1969) : The traditional Upland South cemetery. *Landscape*, 18-2, 39-42 ; Jeane, D. Gregory (1978) : The Upland South cemeteries : an American type. *Journal of Popular Culture*, 11, 895-903 ; Jeane, D. Gregory (1987) : Rural Southern gravestones : sacred artifacts in the Upland folk cemetery. *Markers*, 4, 55-84.
- 3) Jordan, Terry G. (1982) : *Texas Graveyards: A Cultural Legacy*. Univ. of Texas Press, Austin.
- 4) 家屋景観の研究は、おそらく文化景観研究の中で、最も研究事例の多い分野であろう。最も代表的な研究を2つあげると以下のものであろう。Kniffen, Fred B. (1965) : Folk housing : key to diffusion. *Annals of the Association of American Geographers*, 55, 549-577 ; Kniffen, Fred B., and Glassie, Henry (1966) : Building in wood in the eastern United States : a time-place perspective. *Geographical Review*, 56, 40-66.
- 5) たとえば, Zelinsky, Wilbur (1958) : The New England connected Barn. *Geographical Review*, 48, 540-553 ; Comeaux, Malcolm L. (1989) : The Cajun barn. *Geographical Review*, 79, 47-62.
- 6) Trewartha, Glenn T. (1946) : Types of rural settlement in Colonial America. *Geographical Review*, 36, 568-596.
- 7) Newton, Milton B., Jr., and Raphael, C. Nicholas (1971) : Relic roads of East Feliciana Parish, Louisiana. *Geographical Review*, 61, 250-264.
- 8) Mather, Eugene Cotton, and Hart, John Fraser (1954) : Fences and farms. *Geographical Review*, 44, 201-223.
- 9) Kniffen, Fred B. (1936) : Louisiana house types. *Annals of the Association of American Geographers*, 26, 179-193.
- 10) Newton, Milton B., Jr. (1974) : Cultural preadaptation and the Upland South. *Geoscience and Man*, 5, 148-50.
- 11) Newton, Milton B., Jr. (1987) : *Louisiana: A Geographical Portrait*, 2nd ed. Geoforensics, Baton Rouge, 171-207.
- 12) Zelinsky, Wilbur (1976) : Unearthly delights : cemetery names and the map of the changing American afterworld. In Lawenthal, D., and Bowden, M. J., eds., *Geography of the Mind*. Oxford Univ. Press, New York.
- 13) 中川 正 (1988) : ルイジアナ州アセンション郡

- における墓地形態：死の地理学序説. 人文地理学研究, 12, p. 119.
- 14) Newton, Milton B., Jr. (1975): Blurring the north-south contrast. In Del Sesto, S. L., and Gobson, J. L. eds., *Culture of Acadiana: Tradition and Change in South Louisiana*. Univ. of Southwestern Louisiana, Lafayette, 42-48.
- 15) *New Orleans City Ordinance 1831, Burial Grounds, Art. 4.*
- 16) Jeane (1987): 前掲2), p. 62.
- 17) 前掲3), p. 37.
- 18) 前掲3), p. 34.
- 19) Jeane (1978): 前掲2), 899-900.
- 20) 前掲3), p. 21.
- 21) 前掲3), p. 21.
- 22) Vlach, John Michael (1978): Graveyard decoration. In *The Afro-American Tradition in Decorative Arts*, Cleveland Museum of Art, Cleveland, 139-147.
- 23) 前掲3), p. 21.
- 24) Clark, Sara (1972): The decoration of graves in central Texas with seashells. In Hudson, Wilson M., ed., *Diamond Bossie and the Shepherds*. Encino Press, Austin, p. 33.
- 25) 前掲3), p. 25.
- 26) Jeane (1978): 前掲2), p. 900.
- 27) Jenae (1978): 前掲2), 900-901.
- 28) 前掲3), 19-25.
- 29) 本稿の方法論的立場に関しては、次の論文に詳述されている。
中川 正 (1989): 還元主義的文化景観解釈法, 人文地理学研究, 13, 111-128.

Grave Structures and Decorations of Louisiana Cemeteries

Tadashi NAKAGAWA

This study proposes a systematic and objective method for presenting and analyzing cultural landscape by applying it for the interpretation of the cemetery landscape in Louisiana.

A systematic sampling was made in order to identify regional, religious, racial, and urban-rural patterns of the landscape. From 3,180 cemeteries identified in the United States Geological Survey's large-scale topographical quadrangles, 236 were chosen for analysis by means of a stratified sampling. From each fifteen minute map within Louisiana, the cemetery closest to the center of the map was selected. To be eligible for analysis, two criteria had to be met: 1) the cemetery must have been established before 1930, and 2) it must be still in use. In addition to those cemeteries, one from each parish seat was chosen in order to achieve a balance between urban and rural cemeteries. If more than one cemetery existed in a parish seat, the cemetery chosen was either older, larger, or dominantly white. Data were collected through field survey by the author between December 1984 and May 1985.

The cemeteries are mapped, each with symbols of various social attributes in order to interpret the distribution in a systematic manner (Fig. 1). North and South Louisiana are marked by a heuristic boundary established by previous studies. Urban cemeteries are marked either with the letter *S* (parish seat) or with the letter *U* (other cities with the population of more than 1,000). Cemeteries without letter symbols are rural. Catholic, Protestant, white, and black cemeteries are distinguished by shapes of the symbols.

Catholic is symbolized by a circle, white Protestant by a triangle, black Protestant by a triangle, and Jewish by a diamond.

On the base map prepared in this method, the distribution of copings, grave sheds, shell decoration, toy decoration, flower-pot decoration, and photographs of the deceased are presented and analyzed (Figs. 2 - 8). The findings of this study indicate that grave sheds and the custom of placing shells, toys, and other various articles are few even in the Upland area, although previous reports described these items as typical Upland South traits. It is true that that these elements are significantly more numerous in North Louisiana than in South Louisiana. However, previous studies failed to present how typical these traits were. The method of this study could demonstrate these traits in the manner readers could judge.

As a result of analyzing the distribution through religion, race and urban-rural location as well as cultural areas, this study could identify that various group identity reflects to the landscape in different degrees. For example, the distribution of copings were more related to urban-rural location and race than to culture areas (North-South Louisiana). The distribution of photographs of the deceased reflected racial and religious identity more strongly than the identity with cultural areas. The method of this study could successfully present the reality of the cemetery landscape as reflections of various geographical and social group identities.



写真1 家族の埋葬地を区画するコーピング

北ルイジアナの都市に存在する白人プロテスタント墓地には、この写真のようにコーピングによって家族ごとに区画する景観が見られることが多い。

(マウント・オリーブ墓地、地図上の位置7G；1985年5月)



写真2 個々の埋葬地を縁どるコーピング

コーピングには、個々の埋葬地を示すものもあり、コーピングで縁どられた中は、砂、砂利、白い大理石の小片等を敷き詰める場合もある。

(ビュラー墓地、9O；1985年2月)



写真3 ニューオリンズに存在する背の高いコーピング

ニューオリンズには、30cmから1mの高さに築かれたコーピングが数多く存在する。この写真に示されているコーピングは、1家族のものであり、家族のメンバーが死んだときに、古い棺を掘り起こして、中の遺骨等を更に深い地点に埋め、新しい棺をその上に埋葬してきた。

(フックアンドラダー墓地、13P；1984年12月)

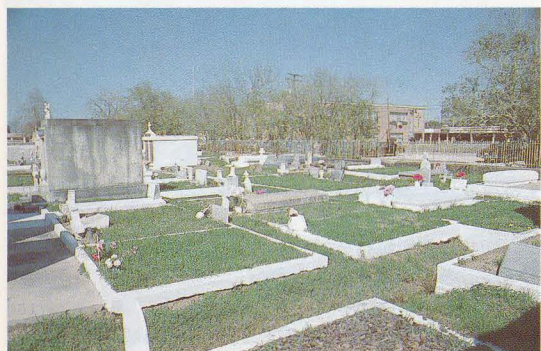


写真4 南ルイジアナに存在する白く塗られたコーピング

南ルイジアナのミシシッピ川に分布するコーピングは、幾分ニューオリンズ型に近い形態を示している。20cmから40cm程度の高さのコーピングは、白く塗られ、北ルイジアナのものとは異なった景観を呈している。

(セント・ピータース・カトリック墓地、12N；1985年3月)

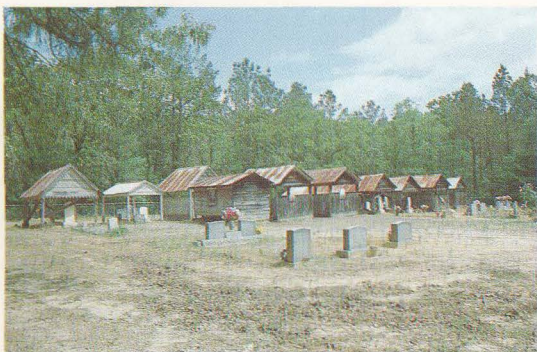


写真5 墓屋が数多くみられる北ルイジアナ農村の白人プロテスタント墓地

墓屋 (grave shed) は、埋葬地の上に建てられた家型の建築物であり、合衆国南部にごくわずかにみられる景観要素である。

(パイン・グローブ墓地, ベルノン郡; 1985年4月)



写真6 1894年に建築されたビクトリア様式の墓屋

家の縦板の先端が、装飾的なカットワークになっており、当時ルイジアナの建築に流行していた後期ビクトリア様式を反映している。

(パイン・グローブ墓地, ベルノン郡; 1985年4月)



写真7 1932年に建築されたバンガロー様式を反映した墓屋

軒先に伸びている梁の先端が見える形態は、ルイジアナにおいて1920年代から1940年代にかけて流行したバンガロー建築様式を反映している。

(プレウィッツ罰, 7C; 1985年5月)



写真8 アルミニウムの屋根と花崗岩の柱を持つ1954年建築の墓屋

1940年代以降に建築された墓屋は例外的なものであるが、この1954年建築の墓屋には現代的な要素が現れている。

(プレゼント・ヒル墓地, 1B; 1985年3月)



写真9 牡蠣の殻を並べた埋葬塚

この写真のような、埋葬塚に二枚貝を並べる形態が、最も一般的な貝装飾形態である。

(オークヒル墓地, 9 F ; 1985年 4 月)



写真10 貝装飾を行った埋葬地をコンクリートで固めた墓

(アミート市営墓地, 10N ; 1985年 2 月)



写真11 巻貝を墓石の上に乗せた貝装飾形態

(ハリソンバーグ墓地, 5 I ; 1985年 5 月)

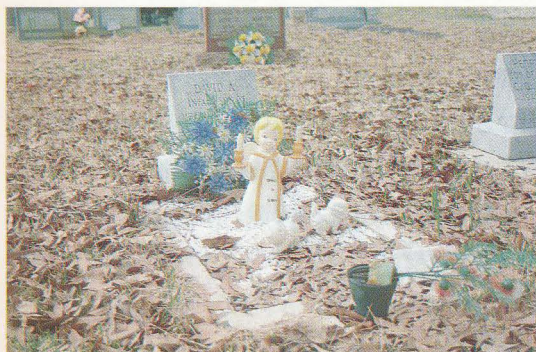


写真12 童天使と動物の玩具を置いた子供の墓

(バンクストン墓地, 10N ; 1985年 2 月)



写真13 陶器製の小犬を置いた子供の墓
(レッド・オーク墓地, 11N ; 1985年2月)



写真14 鉢植えを墓上に並べた装飾形態
かつては、北ルイジアナに、埋葬地の上に貝、水差し、瓶、皿、花瓶、玩具、人形など様々な物が一度に置かれる装飾形態があったと報告されているが、現在では、この写真のように鉢植等一種類の物を並べる形態が見られる程度である。
(ミッチェル墓地, 11O ; 1985年2月)



写真15 鉢植えをコンクリート棺上に並べた装飾形態
コンクリート棺が卓越する墓地では、埋葬形態が変化しても、装飾形態を変化させずに残す場合がある。
(プロビデンス墓地, 12O ; 1985年1月)



写真16 故人の写真を墓石につける装飾形態
故人の写真をとりつける形態は、1960年頃から始まり、1980年代になって増加してきた。
(マウント・ザイオン・バプテスト墓地, アセンション郡 ; 1984年9月)